

疑うことで、自由になれる

Navigator

文学部 / 哲学専攻

宮武 昭 教授

Akira Miyatake

宮武 昭 (みやたけ あきら)

1949年、北海道生まれ。北海道函館北高等学校卒業。東北大学文学部哲学専攻卒業。東北大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了。同大学院文学研究科哲学専攻博士課程中退。東北大学文学部助手、中央大学文学部助教等を経て、1990年より現職。

1冊の本との出会いで、研究の方向が定まる

1983年、宮武先生30代半ばのお正月のこと。屠蘇^{とそ}機嫌^{けん}も抜けた先生は、たまたまカタログで見かけて購入し、そのままにしておいた本『Philosophische Skepsis (哲学的懐疑)』を手に取り、読み始めた。そして、大きな衝撃を受ける。

「私は近代西洋哲学を築き上げた哲学者の一人、カントで研究者生活をスタートさせました。カントは、真理については絶対化(あるものについて、それを唯一絶対であるとせず、いろいろな角度からとらえて見つめること)する視点を持っていました。善については、絶対的な善の存在を主張する立場でした。研究を進めるうち、私はその説にすっかりこなものを感ずるようになっていったのです。それが、古代から現代に至るまでの懐疑主義の主な説を取り上げたこの本を読んで、カント哲学に抱いていた違和感の正体をはっきりつかむことができた。その後早速、懐疑主義の一派ピュロニズムのテキストに取り組みました」カント哲学への違和感から薄れかけていた研究への情熱が、この本との出会いによって一気に再燃したという。以来30年、先生は懐疑主義の視点から近代哲学の見直しを行っている。「まだまだ、ものになったという気がしません」と先生は笑う。「現在は、イギリスを中心とした近代哲学と懐

疑主義との関連を追っています。懐疑主義の影響は、これまで言われてきた以上に、あるいは私が予想していた以上に広がって深い。懐疑主義的な発想が息づいているのを、さまざまなどころから見出すことができず。追究すればするほど、面白さを感じますね」

あらゆることを疑い、思い込みを揺るがせる

「懐疑主義」とは、あらゆること、例え自明(わかりきっている)とされることでも「本当にそうなのか、別の見方はないか?」と疑問を持つ考え方や立場のことである。真理や善にとどまらず事実までも疑い、自らの認識や判断についても信じ込むことはない。想像してほしい、もし、あなたが今まで「正しい」と当たり前のように受け止めてきた事柄について疑ってみたら。すると自分がこれまで信じてきたものの輪郭がぼやけ、足元が揺らぐような不安な気分を感じるのではないだろうか。しかし、それが重要なだと先生は言う。「疑うことすらなく、自分が絶対的な基準として受け入れてきたことについて、懐疑主義は、まったく別のとらえ方や考え方があり可能性を示唆します。すると、今まで自明だと思っていたことが、そうではないのかもしれないと気づかされる。基準を崩され、不安になるのは当然です」そして、思い込みはむしろ揺るがせるべき、と続けた。「特

に知識人によく見られる傾向ですが、自分の考えや主張を正しい、善だととらえて疑問を持たない姿勢を独断主義(Dogmatism)といいます。これはとても怖ろしいこと。独断主義者は自分以外の存在を見下し、自分の考えのもとに人や社会をつくり変えようとする。自分の考えが正しいと信じて疑わないから、それを他人に押し付ける。異なる考えを悪と決め付けて拒絶し、徹底的に排除しようとする。人類が歴史の中で続けてきた争いの多くは、自らを善だと主張する者同士の対立です」

だからこそ懐疑主義の視点、「自分の考えや主張は、絶対的に正しいものではないのかもしれない」という意識が大切なのだ、先生は語った。「懐疑主義には、独断主義に冷水を浴びせる側面があります。対話などという生易しい方法では、善と善との対立に決着を付けることはできない。懐疑主義の視点がなければ、善同士争いはいつまでたっても終わることがないでしょう」



先生の翻訳書や共訳書。先生は、数多くの哲学書の翻訳を手掛けている。

「善への強迫」に 取り付かれた独断主義

懐疑主義の特徴の一つに、あらゆることについて「判断を保留する」というものがある。学生からは「懐疑主義はとらえどころがない」という声も聞こえてくるそうだが、「それはそうですよ。懐疑主義の視点に立てば、積極的に主張したいことなどないですから」と先生は笑う。

物ごとを善悪に分け、より善い状態を追求する独断主義を、先生は「善への強迫」に取り付かれていていると見る。「常により善い状態を目指すのが望ましい生き方だ、という考えは近代ヨーロッパで生まれたものです

ね。裕福や高い地位の獲得を善とする人は、より金持ちに、周囲により認められるようにならなければ、と強迫観念に追われて努力するでしょう。それは向上心と言えるかもしれませんが、他面では煩惱にもなる。実際に裕福になったり高い地位を得たとしても、それを維持し続けるために汲々としなければならぬ。こうした生き方では、フラストラーション

ンがたまるばかりです」

そこで、善悪の区別をしない懐疑主義の視点に立ってみる。すると「裕福や高い地位は本当に善で、それを追い求めなければならぬのか?」と疑問が生まれ、強迫観念からの突破口が見えてくる。懐疑主義とは疑うことを通じて何物にもとらわれず、自由になれる考え方だと言えるかもしれない。「多くの人には安定を求め、揺るぎない絶対的なものに頼りたい、という思いがあるでしょう。しかし、もしもそれを失ったら?と考えると、何かにしがみ付いて生きる方が、本当は不安定な状態なのかもしれない、と私は思います」

強固な地盤などない、 足元は揺らいで当たり前前

現代は、新しいものにこそ価値がある、とされやすい。そんな中でも先生は、まず古典を通じて先人の知恵を学ぶことを学生に指導している。「哲学では、自分で考えることが重視されますが、何ら蓄積のない状態では、およそ考えることはできません。古典として私たちが手に取ることができる書物は、多くの人による何百年、何千年にもわたる吟味に耐えてきたもの。これを徹底的に学ぶことで、考える土台を培っていく。強固で斬新な思想は、その上にこそ生み出されるものでしょう」

先生の授業では、「ひたすら原典を正確に読む」ことが重視される。「原典を読んで、長い間多くの人の研究

対象になつてきた思想はどのように書かれているのか、それぞれの国の文章はどのような構造で成り立っているのかをしっかりと理解して、正確に読み取る力」を養えば、翻訳も原文を推測しながら読めるようになるし、日本語の文章も正確に読み書きできるようになる。このことは、30年の教員生活から保証できます」

学生の最大の財産は時間、と先生は言う。「おまけに、10代後半から20代前半は頭も柔軟で、知識をどんどん吸い込める時期。文学部の学生の使命は本を読むことです。から、とにかく多くの本を読んで、さまざまな考えや言語に触れてほしい。ドイツ語やフランス語はもちろん、ラテン語やギリシア語のような古典語も、1年か2年本気で勉強すればある程度は習得できるはずですよ」

哲学は毒のある学問。これを学ぶ学生には精神面の強靱さも身に付けてほしい、と先生は考えている。「特に懐疑主義については、もろいままに勉強すれば不安が深まるばかりでしょう」けれど、と先生は穏やかな声で続けた。「本当は、それほど恐れる必要もないのです。足元が揺らいだら、また別の地盤に立てばいいやがて、未来永劫存在し続ける土台などないと理解する時が来るでしょう。揺らぐことが当たり前なのだと思え入れられた時、声高に語られる「善」などの既定の価値観に追われることのない自由を、人は獲得しているのかもしれない」



先生が授業で配布しているレジュメ。学びに際して視野を広げられるよう、関連書籍の紹介もなされている。

切にしていきたいのは「古典」を読むこと。古典は「論理的に」、つまり道筋を立てて書かれています。こうした書を精読することは、正確な日本語を書く訓練にもなります。まさに吉田兼好の言う通り、「先達はあらまほしき事なり」です。自力で何もかもできる人は、大学になど来る必要はありません。



培ってきた選択眼のもと、「若い人」と先生が勧めてくださった書籍。読む本を選ぶのに苦労しているならば、中野翠さんのような「読書の達人」たちの案内を活用してもいい、と先生。



いろいろなことにモチベーションを抱ける若い時期に出会ったことは幸運だった、と先生がコメントする「特別な一冊」。

“Close up,”



現在の研究テーマを教えてください

古代および近代ヨーロッパ哲学における懐疑主義

どんな高校生でしたか?

往時茫々ですし、回答したくありません。我々は後知恵で過去を捏造する、つまり、合理化や美化など、「回顧的錯覚」という欺まんを避けられないからです。

お薦めの本を3冊あげてください

1. 『ラヴズ・ボディ』
ブラウン (みすず書房)

私が翻訳を手がけた本。フロイトに鼓舞され、西洋的な思考の解体を目指した思想詩です。手前味噌ですが、これまでに訳した多くの作

品の中で、最も刺激的なもの。訳していて、めったにない知的興奮を味わいました。

2. 『磁石と重力の発見』
山本義隆 (みすず書房)

これほどまでに迫力のある科学史も珍しい。思想史としても第一級の作品。

3. 『逝きし世の面影』
渡辺京二 (葦書房・平凡社ライブラリー)

かつての江戸ブームが去った現在でも、この著者の慧眼は新鮮です。西洋的文明を相対化するためには必読の一冊。

先生にとっての“特別な一冊”は?

『Philosophische Skepsis』
Christoph Wild, 1980

インタビューでもお話した、古代から現代までの懐疑主義の主な説を考察した本です。哲学の面白さと奥深さを改めて示してくれたこの本を手にしなければ、現在の自分はなかったと思います。

高校生へメッセージ

とにかく、多読・乱読をお勧めしたい。想像力が涵養されますし、若い人には不可避な「経験不足」を補完することもできます。特に大